

大村しげに祖母を重ねて

池田峰子

実は「おばんざい」という言葉を筆者は知らなかった。フランス料理やイタリア料理ではなく、日本の料理であることくらいは知っていたが、「なんか、食べるものことなんかなあ。」くらいにしか思っていなかった。もちろん、大村しげも知らなかった。料理にはほとんど興味もないし、食べることはエネルギー補給にくらいしか思っていなかった。

このような筆者だが、大村しげのことを書いてみたいと思った。なぜなら、大村しげは自称「物書き」と言っている。「なんで？おばんざいっていう料理をする人のことやないの？」と不思議に思ったからである。料理とか京都の暮らしとか、京都観光とかにも興味がない。大村しげの書いた本も読んだこともないし、料理の本も読みたいと思わない。

そんな筆者が興味を持って読めそうな本として、横川公子・笹原亮二編、『モノに見る生活文化とその時代に関する研究－国立民族学博物館所蔵の大村しげコレクションを通して－』の調査報告書の1冊を読んだ。コレクションというと、なにかレコードやフィギュアなど個人の趣味と価値観で集めた物かと思う節もある。しかし、この国立民族学博物館所蔵大村しげコレクションとは、大村しげ（本名 大村重子 1918年～1999年）がバリ島で亡くなられた後、京都市中京区の姉小路の家に遺されたものの一切が、彼女の意思に従って国立民族学博物館に寄贈されたものである。（横川 2007: 1）。

大村しげコレクションの調査研究の報告書であるこの本は、コレクションのすべての内容を調査し、データにすること、さらにコレクションを対象として、大村しげの生活様式と人生や価値意識を再現・理解し、コレクションの社会的・文化的機能をさぐることにあつたとされる（横川 2007: 2）。コレクションの総数は14,542件であり、執筆や出版に関するものが多くある。他にも調理器具に食器、領収書や商品タグ、包み紙やチラシなど数多くある（横川 2007: 39～44）。著者の横川公子は、「なんでも残した大村しげの考え方が反映していると思われる」（横川 2007: 44）と書いている。

読み進めていくと、結構楽しい。とりわけ「おばんざいの大村しげ」と言われている大村しげが、包み紙やチラシを残しておいているところや、「おばんざいの専門家、京料理の研究者という評判を得る一方で、普段の夕食には寺町商店街などでコロッケなど出来合いの惣菜を買って済ませることも多かった。」（角野 2007: 117）などの記述が、筆者の亡き祖母（大正生まれ）に重なるところがあり、親近感を持てるのである。

この報告書を読んでから、筆者は少しおばんざいが好きになってきたように思う。本稿で



はあまり食に興味が無い筆者の目線から、食や料理、おぼんざいに興味の無い人がちょっとでも好きになってもらえたらいいな、という感じで綴ってみようと思う。大村しげコレクションの調査研究報告書に書かれている、大村しげの暮らしぶりから、なぜ筆者がおぼんざいを少し好きになったのかについて書き進めてみたい。そして、本稿を書こうと思った理由である、大村しげが自称「物書き」と言っていた事情に少し触れて終わりたいと思う。

大村しげと祖母を重ねて

まず、筆者は大村しげが「不用品に埋まって暮らしていた」ということに興味をもった。

ある日、布のお礼というて、小さい袋物をいっぱいいただいた。小銭入れにしたいような、化粧品入にしたいような小袋である。(中略)これはわたしの羽織やった、これは母の大事な着物やったなあと、そこにはいっぱい思い出が詰まっている。(中略)私の手元で眠っていた端布が生かされていることが、むしろにうれしい。

「世の中に不要なものはなんにもあらへん。自分にいらんもんでも、人さんにはそれが入用かも知れへんしな」

母のいうていたことにも、一理あると思うて、わたしはますます不用品に埋まってくらすことになる。(大村 1993: 42) (横川 2007:126-127)



文書さまざま (大村しげコレクションより)

不用品の山に囲まれていることに対する言い訳は、いろいろな文章で述べられている。

実は筆者の祖母も同様であった。祖母は特にチラシと包装紙が大好きであった部屋にはいつも山のようにチラシや包装紙が窓際に置かれていた。そんな一人暮らしの祖母が80代になってから長期入院していたことがあった。彼女の入院中、娘である筆者の母が部屋に入り、「掃除しておいてあげよう。」という思いで、新聞紙と一緒にチラシや包装紙も廃品回収に出してしまったことがあった。退院後、祖母はすっきりと片付いた部屋の窓際を見て、涙を流しながら「なんで捨てたんやあ！」と激怒していたことを思い出す。

大村しげは「わたしはまたつぎ当てが好きやった」とつぎだらけの着物について『しまつとぜいたくの間』で語っている。実際、大村しげコレクションの資料の中には大量の「はぎれ」に分類されたものが含まれている。それらは和服を新調したときに生じた余りぎれ、洋服を製作した時に生じた裁ち落とし、和洋服を解いたきれ、ふとんを解いたきれなど多様である。そして、資料の衣服類の中にはいたんだ部分につぎを当てて修復したものも多くみら

れる（相川 2007: 237-238）。

筆者の祖母も「つぎあて」が好きであった。針に糸を通すのは孫である筆者のしごと、チクチクと器用に縫うのは祖母のしごとであった。年に何回かしか祖母に会えなかった頃は、会うたびに「糸とおしといてえ」と何本かの針を渡され、まとめて糸をとおしておいたものであった。お針箱は、祖母お気に入りのお菓子の空き缶であった。箱の蓋が色あせてしまって、「貧乏くさい」と家族に言われながらも、彼女はその箱を使い続けていた。

大村しげは、台所のおくどさんについても次のように述べている。

おくどさんは邪魔なだけで、無用の長物でさえある。それでもわたしは、おくどさんの上に神棚があって、そこに供えてある荒神松を毎月お朔日に取り替えるという暮らしを、だいじにしていきたいのである。（大村 1997: 7）（横川 2007: 126）



おくどさんとは、京都の方言で「かまど」のことである。筆者が実物を初めてみたのは2年前の2013年のことであった。大村しげは、消防法で使えなくなってしまった、おくどさんのある暮らしを「だいじにしていきたい」といっている。

さすがに、おくどさんのような大きな調理道具を祖母は使っていなかった。台所は2人立てば手一杯の大きさで、小学生くらいの頃に食器

を洗う手伝いをしたくらいだと思う。台所はいつもきちんと整理され、汚れもあまりなかったように記憶している。祖母は何年たっても同じ鍋とおたまを使って煮物をたいていた。新しい調理道具も横にならんでいたが、いつもの古い鍋を使い続けていた。大村しげも、消防法の規制がなければおくどさんを使っていたのかもしれないと思うのである。

このように、不用品の山に囲まれて暮らす大村しげに親しみを感じてきたので、ちょっと「おばんざい」について書いてあることにも興味がでてきた。どのように書いてあるのかを知りたいと思ってきたので料理について書いてあることについて記していく。

まず、おばんざいとは大村しげにとってどんな料理だったのだろうか。

“おばんざい”というのは、“おかず”のことで、お飯菜の意と聞いています。しきたりの多い京都では、昔から何の日には何を食べるという風習がたくさんあり、京都の主婦はこれを当たり前のこととして、むしろ“おかずを考える手間がはぶける”ぐらいに思い、作ってきました。（朝日新聞京都支局（編） 1966: 1, 3）（藤井 2007: 184-185）

京都のお料理いうたらしまつにしまつなんですねん。（秋山、大村、平山、1974）（藤井

2007: 185)

京都には海がないので、材料的には恵まれていません。そこで、なんでもない料理を手間とひまをかけることによっておいしく食べる工夫をした料理が多いようです。

(大村 1975: 30)

などを書いてあり、不用品に囲まれている料理ではないようである。

「おばんざい」がまだ全国的ではなかった頃、NHKの『きょうの料理』（大村 1977a, 1987）で大村しげが「おばんざい」について説明した文では、

“おばんざい”という言葉をご存じですか。これは京都のことばで、“お飯菜”つまりおかずということなんです。歴史と伝統がいきている京都では、……食べることにしてもいろいろな工夫をしています。……“おばんざい”からおかずの心を学んでくださいね。(大村 1975: 30) (藤井 2007: 189)

である。京都出身ではない筆者にとって、歴史と伝統も、工夫もおかずの心もよく理解できそうにない。加えて、料理のことはよく分からない。そこでもう少し大村しげの文章を用いてみる。

質素なようで、その実、ぜいたくなのが、京のおばんざいではないでしょうか。ぜいたくというのは、味をたいせつに、手間を惜しまないという意味です。(秋山、大村、平山、1974) (藤井 2007: 185)

思い起こせば、祖母も元気なうちは台所をキッチンと片付けていた。体調が悪くなってしまっても、筆者の訪問する日に合わせて、孫の好物である「おまめさん」（大豆の煮もの）を2日もかけてコトコトと炊いてくれていた。「骨が刺さったらあかんから」と娘である母のためには、魚の骨を1本ずつ丁寧にピンセットで抜いていたという話も聞く。

大村しげの言う「おかずの心」とは違うかもしれないが、筆者はおかずを作る人の気持ちだが、おばんざいには込められているような気がする。別に作ることに限ったことではないと思う。コロッケでも焼き芋でも、孫や娘が来る時間に合わせて「あつあつ買ってきたよ、おいしいうちに食べや。」というような、相手を思いやる気持ちが込められているのではないだろうか、と思うのである。まだ、料理を作ってみようとまでは思えないが、なんとなく大村しげのおばんざいが、少し好きになったのであった。

物書き大村しげ

大村しげ（本名 大村重子）は、1918（大正7）年、祇園切通の仕出し屋「魚金」の当主大村金次郎・ウノ夫妻の長女として生まれた。父から京料理の味を、母からは古くから伝わる京都の暮らしぶりを教えられ育ったといわれる。その後、京都市中京区姉小路通り寺町東入ルの借家に移り、晩年にバリ島に移住し、独身で生涯を終える。大村しげは、晩年、自身の肩書きについて「物書き」であると述べている。

わたしは今まで‘おばんざいの大村’と言われてきた。京都の常の日のおかずのことを、おばんざいと言うて、それに日常の暮しも交えて書いてきたからである。あんまり、おばんざい、おばんざいと書き過ぎたからか、そのうち‘料理研究家’やなんて肩書きをつけられた。これはどもなりません。わたしはただ母のやっていたとおりを見て覚え、それをありのまま書いただけで、自分で調べたり、研究したものは何もない。わたしはただの‘物書き’でしかない。初めのうちは、‘随筆家’と言われるのにも戸惑うたけれど

「おばんざいの本も出たことやし、これでええ」と説得されて辛抱した。物書きやなんて肩書きはないそう。な。（大村1999：77-78）（森2007：253）

世間からの評価と自己評価が違うことに納得がいかない様子が伺える。

このあたりの事情は、大村しげは書くことが好きな人であったからではないだろうかと考えた。大村しげは書くことについて、次のように述べている。

文字が躍るように原稿用紙のマス目を埋めていく——ああも言いたい、こうも書きたい。これまで家という殻のなかにとじこめられてきた女性が、戦後、初めて自分の思いを人さまの前で発表しだしたところでした。（大村：1976：61）（森2007：258）

この文から、自分の思いを書きつづることができる喜びを強く感じているようにみてとれる。

また、晩年の著作には、「マス目が埋まっていくのは、なんとしてもたのしい。」（大村1993：25-28）や、「一生懸命に原稿を書いていると、トイレのことなど、つい忘れてしまう」（大村1999：10）、「原稿を書き出して、ほかのことをいっさい忘れて、夢中になっていると、ヨダレが出てくる」（大村1999：12）などの表現が頻出している。（森2007：259）この気持ちもなんとなく筆者にもわかる。心の中で思っていることを文字や絵で表現するだけでも十分楽しいのだが、それを表現する場所があるというのは更に嬉しいと感じるので、より一層夢中になっていくのである。

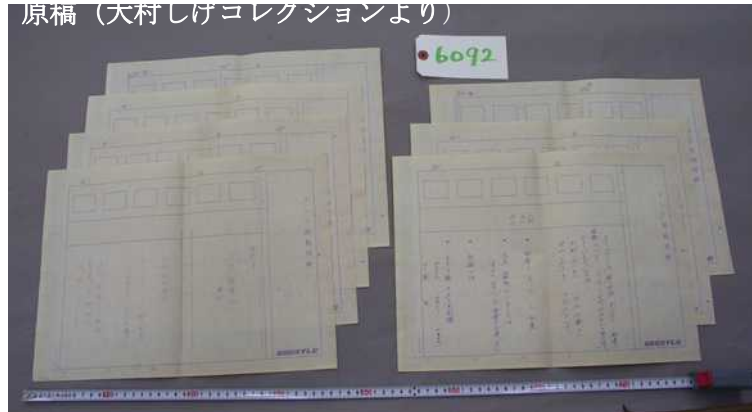
だが、ただ「たのしい」ということだけで「物書き」という肩書にこだわり続けることができるのだろうか、という疑問が残る。大村しげにとって書くこととは、いったいどのようなことであつたのだろうか。

1964年（昭和39）年、大村しげは、朝日新聞京都版に週2回「おぼんざい」という名の連載記事を秋山十三子、平山千鶴らと分担し執筆し始めるのだが、その前の同人誌『わたしの作文』で「文章」について次のように述べている。

私たちはよく〈作文とは何ぞや〉という問題を自出した。しかしそれ以前に、〈文章とは何ぞや〉という問題を解決しなければならなかった。そしてやっと〈文章とは真実を打ち出すことである〉と気づいた。けれど真実というものは事実の中にばかりあるとは限らなかった。（略）そこで作文の世界にフィクションは許されるかという問題に突き当たった。（略）私たちは全面的にフィクションを肯定して作文の分野を切り開こうと試みたのである。要は〈自己に忠実〉であることが第一条件で、とその上でのフィクションは許されると解釈した。（大村 1958：335-7）（森 2007：260-261）

文章に対して真剣に取り組む様子が感じられると思う。大村しげは、「自己に忠実」で「真実を打ち出す」姿勢をもって文字を綴ろうとしていた。「書く」ということに真剣だったからこそ、「物書き」という自称にこだわったのではないだろうか、と筆者は考えるのである。こんなに書く

原稿（大村しげコレクションより）



ことに熱心な大村しげを、「物書き」と呼びたくなったのは、筆者だけであろうか。

書くことにこだわった大村しげの著書には、なにか特別な思いが込められているのではないかと筆者は感じてきたのである。そこで、今度は大村しげの著作を読みたいと思うようになった。そして「物書き」大村しげが、おぼんざいや暮らしについて書いている中から大村しげの思いを探り、考察することを今後の課題としたい。



参考文献

ウィキペディア、(http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AB%88_%E2%83%81%8F%E3%81%A9%29)、2015年1月25日閲覧。

横川公子、笹原亮二編（2007）、『国立民族学博物館調査報告 68 モノに見る生活文化とその時代に関する研究－国立民族学博物館所蔵の大村しげコレクションを通して－』、人間文化研究機構国立民族学博物館。